

～公立図書館による地域の親子への複合的読書支援～

令和2年度地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】採択課題

課題名：多様な家庭の未就学児の親子を対象とした読書支援プログラムの開発

研究代表者：社会福祉学部 准教授 櫻 幸恵

課題提案者：北上市立中央図書館長 児玉康宏

研究メンバー：下平なをみ(社会福祉学部助教) 児玉康宏(北上市立中央図書館長)
村上那子(社会福祉学研究科院生)

技術キーワード：読書習慣、生活課題、社会福祉と社会教育の連携、教育格差の縮減

▼研究の概要（背景・目標）

北上市では、読書への関心が希薄な子どもや保護者の増加、生活困窮による子どもの教育機会の格差が懸念されていた。そこで、本研究では未就学児の家庭に対し読書環境・読書習慣及び生活状況に関する調査を行い、「**生活の中の図書館**」の視点に則り、読書支援と子育て支援・生活支援を結ぶ**社会教育と社会福祉の複合的支援プログラムの開発**を目指した。

▼研究の内容（方法・経過）

1.調査対象

北上市内の保育園・子ども園の3歳児・5歳児クラスに在籍する子どもの保護者

2.調査内容

質問紙調査（読書意識、読書環境、本との関わり、図書館への意識や関わり、保護者の生活実態など）

3.調査期間

2020年12月1日時点（11/30 配布-12/11回収）
753票配布、541票回収、有効回収率71.8%

▼研究の成果（結論・考察）

調査結果からは以下のことが確認できた。

1. 家庭での**読み聞かせ頻度**(図1)や**図書館利用頻度**(図2)と**子どもの本の好き嫌い**には**関係性がみられた**。一緒に本を選ぶ・話をする等の親の関わりと**子どもの本の好き嫌いには関係性がみられた**。

2. 一方で世帯収入や生活環境等の要因により、家庭の**蔵書数や親の関わり、図書館利用の頻度には大きな差異があった**。また、読み聞かせができない理由の**6割は親に時間がないこと**であった。

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

調査では親の関わりが子どもの本への親しみに影響することや、公立図書館への住民の潜在的ニーズが把握された。住民の潜在的ニーズに応え、特に乳幼児期の親子に対する教育と福祉が連携した複合的支援プログラムを検討することは**地域の教育格差を生まないためにも重要**である。ステージⅡでは以下の実装研究を予定している。

- (1) 保健・子育て支援複合施設と連携した、親や子への**読書支援と子育て相談のワンフロア・サービス**
- (2) 絵本をツールに読み聞かせと子育て支援を学ぶ**保護者参加型の複合的支援プログラム**
- (3) 図書館開放により自由に本を楽しむ**子どもの居場所としての新たな空間設定**

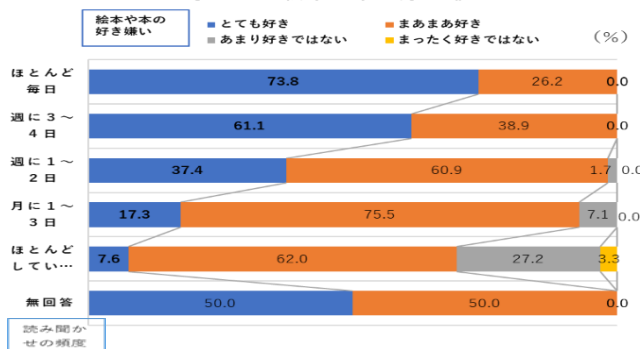
3.全体の**9割**が**子どもが本好きになってほしい**と回答しているが、図書館を利用する世帯は全体の3割に過ぎない。特に**世帯収入が200万円未満では、実際に図書館を利用する世帯は8.3%**と著しく低い。

5. 図書館での催事希望は、図書館の貸切利用28.3%、絵本や児童書の読み聞かせ講座25%、古本市や本の福袋17%、子どもと離れて読書を楽しむ17%、絵本を使った子育て講座16.3%などである。



調査結果から、①**生活課題がある世帯の公立図書館に対する潜在的ニーズ**、②**教育・福祉の連携支援の必要性**、③**利用者ニーズに沿った支援の必要性が把握された**。

(図1) 家庭での絵本や本の読み聞かせ頻度と子どもの絵本や本の好き嫌い



(図2) 北上市立図書館の利用頻度と子どもの絵本や本の好き嫌い

